

第 53 回定期演奏会プログラムノート
大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

この度の東北地方太平洋沖地震並びに台風 12 号におきまして被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

【オルフェとウリディスより 2 つの踊り】

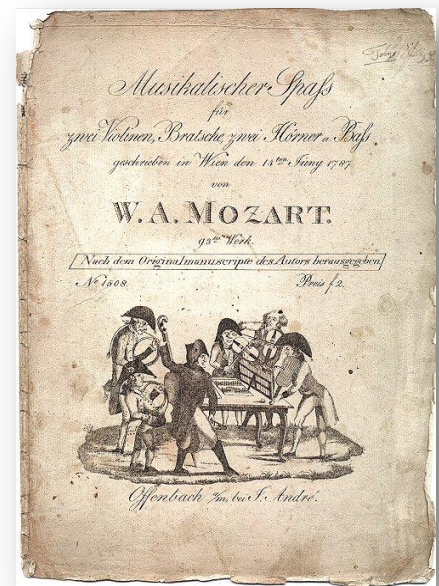
グルックは、華やかな声楽技巧を披露することに重きを置かれていたオペラを「音楽劇」にする、いわゆる「オペラの改革」を行った。改革オペラの代表作である「オルフェオとエウリディーチェ」（イタリア語）は、1762 年 10 月 5 日、皇帝フランツ 1 世の命名日にウィーンのブルク劇場で初演された。皇女マリア・アントーニアにクラヴサンやハープを教えていたグルックは、1773 年、ルイ 16 世に嫁いだマリア・アントーニア改めマリー・アントワネットに従ってパリに移住する。パリでこのオペラを上演するために、当地の楽団に合わせてオーケストレーションを変更し、声楽曲や器楽曲を追加するなど大規模に改訂した。1774 年 8 月 2 日、パリの王立音楽アカデミー（オペラ座）で「オルフェとウリディス」（フランス語）は初演された。オペラのあらすじは次の通りである。妻ウリディスの葬儀で幕が開ける。妖精や羊飼いが、香を焚き、花を撒き散らして哀悼の歌を歌う。一人になったオルフェは、妻の名を叫ぶ。オルフェは、神々の冷酷さに激怒し、ウリディスを神々から奪い返し、この世に連れ戻す決心をする。愛の女神アモーレが登場し、復讐の女神たちを歌で鎮めることができるなら、ウリディスを連れて帰れるという。ただし、この世に戻ってくる前にウリディスを見てしまったら、今度は永久に妻を失うことになる」と警告する。黄泉の世界の入口で、オルフェは復讐の女神と悪霊たちに執拗に威嚇されるが、復讐の女神たちはオルフェの嘆願に次第に心を動かされ、黄泉の国への道をあける。ここで挿入される音楽がパリ版で追加された「復讐の女神の踊り」である。これは自作のバレエ「ドン・ジュアン」（1761 年）から引用された二短調の大規模な恐怖の踊りである。最後の 10 小節で転調を繰り返して最終的には二長調に変わり、場面は黄泉の国から天国（シャンゼリゼ）の野原へと情景が移る。そこでは「幸福の精霊たちの踊り」が繰り返されている。この曲は、伝統的なパストラレの調であるへ長調で書かれ、レントの速度表示にフランス語で「とても優しく」と追記されている。「同じテンポで」との指示がある二短調の中間部と主部の繰返しは、ウィーン版にはなく、パリ版で追加された。精霊たちに導かれて来たウリディスをオルフェは急いでついて来るよう促す。オルフェのよそよそしい態度に不審を抱くウリディス。「どうして黙っているの、なんという逆境」オルフェは耐えられず、振り返ってウリディスを見てしまう。その瞬間、彼女は死んでしまう。オルフェは絶望し、自ら命を断とうとしたとき、再び愛の神アモーレが現れ、オルフェは自らの誠実さを充分証明して見せたと言って、ウリディスを生き返らせる。アモーレの神殿でオルフェ、ウリディス、アモーレ、羊飼いたちと女羊飼いたちが喜びを祝って幕を閉じる。グルックは、その後ウィーンに戻り、1787 年 11 月 15 日に亡くなった。モーツァルトが 10 月 29 日、プラハで「ドン・ジョバンニ」KV 527 を初演し、ウィーンに戻った翌日だった。グルックが死去したため、皇王室宮廷音楽家の称号はモーツァルトに与えられ、12 月 1 日から年棒 800 グルデンが支給される



ことになった。(ちなみにグルックの年棒は2000グルデンだった。1グルデン=1フローリン銀貨=60クロイツァー銅貨、1ドゥカーテン金貨=4.5フローリン銀貨) モーツァルトの父、レーオポルトは息子のオペラ上演の妨害をしたとしてグルックに対して警戒心を持っていたが、グルックはモーツァルトを高く評価しており、たびたび食事に招待していたことが、モーツァルトの手紙で明らかになっている。また、モーツァルトは、東方に舞台をとったグルック作曲の「メッカの巡礼たち」からヒントや刺激を得ており、トルコ近衛兵軍楽をウィーンにおけるデビュー作で活用した。モーツァルトがグルックに敬意を表して作曲した「メッカの巡礼たち」のアリエッタ「愚民の思うは」による10の変奏曲KV 455は、1783年3月23日、ブルク劇場で行われたヨーゼフ2世の御前演奏会でハフナー交響曲とともに演奏された。

【アイネ・クライネ・ナハトムジーク ト長調 KV 525】

グルックが死去した1787年といえば、モーツァルトの父レーオポルトが死去した年でもある。5月28日のことだった。10月28日に完成した、父親の死で始まる「ドン・ジョバンニ」KV 527や6月14日に完成した「音楽の冗談」KV 522は、レーオポルトの死と関連付けて語られることが多い。しかし、いずれの曲も父親の死よりずっと以前に作曲に着手されている。6月4日には「死んだむくどりを悼む詩」が書かれ、6月24日にリート「夕べの想い」KV 523、「クローエに」KV 524の作曲を経て、8月10日に自作全作品目録に「アイネ・クライネ・ナハトムジーク (小夜曲) アレグロ、メヌエットとトリオ、——ロマンス、メヌエットとトリオ、それにフィナーレよりなる。——ヴァイオリン2、ヴィオラとバス」と書き込まれる。「ドン・ジョバンニ」の創作の合間を縫って作曲されたこのセレナーデ。作曲の動機は不明である。モーツァルトは皇帝ヨーゼフ2世の姪にあたる、弟レーオポルト大公の娘、マリーア・テレージア大公女とザクセン侯アントーン・クレメンス皇子の結婚のお祝いのために委嘱された「ドン・ジョバンニ」の作曲に忙しく、ザルツブルクに帰省して、父を見舞い、葬儀に参列する余裕はなかった。セレナーデやディヴェルティメントを数多く作曲し、家族と過ごした故郷ザルツブルクでの日々を偲んで、この名曲を作曲したのかもしれない。6月14日に完成した「音楽の冗談」KV 522は、自作全作品目録にはヴァイオリン2、ヴィオラ、ホルン2とバスという編成が記載されている。バスは単数形でBaßoと表記されているため、ザルツブルク時代に数多く作曲したセレナーデやディヴェルティメントと同様、「バス」はコントラバスのみで演奏することを想定していると考えられる。1802年にアンドレより出版された楽譜の挿絵にも6名の奏者が描かれている。一方、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」はBaßiと複数形になっていることから、モーツァルトは、チェロとコントラバスを含む小編成の弦楽オーケストラでの演奏を意図したのではないかと考えられている。とはいっても、弦楽四重奏や弦楽五重奏で演奏することを否定するものではない。第2楽章におかれていたメヌエットとトリオは、自筆譜から切り離されてしまっていて消息不明のままである。モーツァルトの死後、コンスタンツェ未亡人がモーツァルトの自筆譜を裁断して世話になった人やモーツァルト愛好家に譲ったことがあった。この第2楽章も同じ運命をたどったのかもしれない。「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」が書かれたころ、モーツァルトは頻繁に姉ナンネルと遺産相続を相談する手紙をやり取りしていた。モーツァルトからナンネルに宛てた8月1日付の



手紙で、1000 グルテンを帝国貨幣ではなく、ヴィーンのお金で、しかも小切手で支払ってほしいと連絡している。(帝国貨幣の 1000 フローリンは、ヴィーン通貨の 1200 フローリンに相当する) 9月 25 日から 4 日間、レーオポルトの遺品はタンツマイスターハウスで競売にかけられ、1507 フローリン 56 クロイツァーの売上があった。モーツァルトが義兄のゾンネンブルクに宛てた 9月 29 日付の手紙で、為替手形をヴァルゼック伯爵(レクイエムをモーツァルトに委嘱した人物) 気付プフベルク宛に送るよう、連絡している。このころすでにプフベルクに借金があったようである。

【ディヴェルティメント ニ長調 KV 251】

モーツァルト家と親しかった、ジークムント・ハフナー2世は、妹マリーア・エリーザベトの婚礼の前夜祭(1776年 7月 21日)の音楽を委嘱した。いわゆるハフナー・セレナーデ KV 250である。そのわずか4日後、7月 25日に姉ナンネルのためにディヴェルティメント KV 251が作曲される。7月 26日はナンネルの霊名の祝日で前夜に祝事が行われた。そのための音楽である。1778年 7月 3日、母マリーア・アンナと旅行中のパリで母と死別したモーツァルトが7月 18日、20日付で父レーオポルトに宛てた手紙に以下のように記されている。最愛の母を異国の地で失った直後の家族の絆が感じられる。

お祝いの言葉がこんなに遅くなってしまったことをどうぞお許してください。——でも、やはりお姉さんにちょっとした前奏曲を贈りたいと思ったのです。

封筒の内側には、姉へ追伸が記されている。

最愛のお姉さん！

あなたの霊名の祝日がきましたね！—(中略)—数年前のように、音楽の贈り物をプレゼントできなくて残念です。——でも、心を同じくする二人の情愛こまやかな姉弟が、それぞれ考えたり思ったりしていることをまた心おきなく話し合える仕合せな時が、そう遠くないことを期待したいものです。

それに対し、9月 10日付の父からモーツァルトに宛てた手紙に、追伸として姉から返事があった。

前奏曲のことで私、自分でお礼を言いたいと思いますし、あなたの霊名の祝日にザルツブルクでお祝いしたいと思っています。

姉のために作曲したディヴェルティメントであるが、フィナールムジークとしても使用されたい。フィナールムジークは、8月の初旬の水曜日に行われるザルツブルク大学の学生たちが専門課程に進む前に、2年間の教養課程の最終試験終了後に大司教と教授たちに感謝をこめて演奏される卒業演奏のことである。ザルツブルクに住む父レーオポルトからマンハイムに旅行中の息子に宛てた 1778年 11月 23日付の手紙に、以下のようにこのディヴェルティメントのことが記載されている。

7時には宮殿に行って、フィアラーはコンチェルトを一曲吹きましたが、初めのシンフォニーはおまえのフィナールムジークのシンフォニーで、オーボエのソロつきのアンダンテとトリオを持っています。

【交響曲 第14番 イ長調 KV 114】

また少し時代は遡って1771年12月15日。モーツァルト父子はイタリア旅行からザルツブルクに帰郷した。その翌日、モーツァルト家を庇護してきた大司教ジークムント・フォン・シュラッテンバッハがその74歳の生涯を閉じた。二週間後の12月30日に完成したのが、交響曲第14番イ長調である。管楽器の活躍、対位法の多用、4楽章構成であることなど、これまでの交響曲より規模が大きく、ヴィゼワ＝サン＝フォアは、イタリア的な要素を残しながらも、「オーストリア風」あるいは「ヴィーン風」の作風になっていると指摘している。何のためにこの交響曲が作曲されたのかは不明であるが、大司教の喪服期間のため、あるいは、控え目な四旬節の祝祭のため、あるいは、新大司教を迎え入れるために必要であったと考えられている。新モーツァルト全集の編集者は、KV 61gIのイ長調のメヌエット（編成は、フルート2、ヴァイオリン2、ヴィオラ、バス）がこの交響曲のために作曲されたと考えていたが、アラン・タイソンの自筆楽譜の研究により、1770年には既に作曲されていたことが判明。編成にヴィオラがありホルンがないことから、舞曲ではなく、交響曲のメヌエットのトリオとして作曲されたのではないかと推察している。アインシュタインが1936年より以前、自筆譜を調べたときに、もうひとつのメヌエット（主部のみ）を発見していた。アインシュタインはこれを初稿であると考えた。採用されなかった初稿のメヌエットは第2楽章の主題の焼き直しになっており、モーツァルトが曲全体を統一感のあるものに仕上げようと意図していたことが分かる。本日の演奏会ではこの初稿のメヌエットの主部と、第2稿で作曲されたイ短調の物悲しいトリオと合わせて演奏する。1772年4月29日、モーツァルトが後にヴィーンへの移住を決意することになる新大司教ヒエローニムス・フォン・コロレード伯爵がザルツブルクに入城し、8月21日に16歳のモーツァルトは有給のコンツェルトマイスターに昇格した。年棒は、150グルデン。そして10月24日、再びイタリアへと旅に出るのであった。（2011年9月19日）

【参考文献】

1. Rien de Reede: Christoph Willibald Gluck Reigen seliger Geister für Flöte und Orchester, Amadeus Verlag (1982)
2. Wolfgang Rehm: Mozart Eine kleine Nachtmusik für Streicher KV 525 Bärenreiter Verlag (2000)
3. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage (1983)
4. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)
5. スタンリー・セイディ (中矢一義、土田英三郎 監修): 新グローブオペラ事典, 白水社 (2006)
6. ヘルマン・アーベルト (吉田泰輔 訳): モーツァルトとグルック (モーツァルト叢書11「モーツァルトと大作曲家たち」), 音楽之友社 (1977)
7. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳, ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989)
8. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976)
9. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980)
10. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集IV, 白水社 (1990)

11. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995)
12. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001)

【Programm】

C. W. グルック

Christoph Willibald Gluck (1714-1787)

オルフェとウリディス (オルフェオとエウリディーチェ) (1774) より

Orphée et Eurydice, Tragédie-Opéra

第 28 曲「復讐の女神たちの踊り」 ニ短調

N° 28 - "Danse des Furies"

Vivace

第 29 曲「精霊の踊り」 へ長調

N° 29 - "Danses des Ombres Heureuses"

Lent, très doux - Même mouv.t - On reprend le 1.^{er} Air

W. A. モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

アイネ・クライネ・ナハトムジーク ト長調 (1787)

Eine kleine Nachtmusik G-Dur KV 525

I. Allegro

II. ROMANCE: Andante

III. MENUETTO mit Trio: Allegretto

IV. RONDO: Allegro

----- 休憩 Pause -----

W. A. モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ディヴェルティメント ニ長調 (1776)

Divertimento D-Dur KV 251

I. MARCIA ALLA FRANCESE

II. Molto allegro

III. MENUETTO mit Trio

IV. Andantino - Adagio - Allegretto

V. MENUETTO: *Tema con Variazioni*

VI. RONDEAU: Allegro assai

VII. MARCIA ALLA FRANCESE

W. A. モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

交響曲 第14番 イ長調 (1771)

Sinfonie Nr. 14 A-Dur KV 114

I. Allegro moderato

II. Andante

III. MENUETTO mit Trio

IV. Molto allegro